

クラスの社会心理

クラスは一人の生徒だけではなくて何十人かの生徒から成り、従ってそれは集団場面である。人々が集団を形成し、集団生活が続けられていると、そこに集団場面特有のいろいろの現象が認められる。クラスが集団場面であることから生ずる主要な特性について述べてみようと思う。

教育を受けるには個人教授が理想とされた時代があった。むかしの貴族などの子弟は専ら家庭教師による個人教授によって教育を受けていた。現在は集団的教育の利点が次第に認められて来ている。教育者は単に国語や算数などの知識を生徒に与えるだけでは事足りず、社会生活の仕方、他の人々と協力することを学ばせなければならぬ。一般教育の主要な目的の一つが健全なる市民の育成にあるということから考えてもそれは当然

のことである。

クラス内の対人関係が子供の安定感に大きな影響を及ぼしている

子供は、未知の場面や敵対的な力にぶつかって、これを克服するだけの自己の力がない場合には安定感を失う。けれども、このような場合に若し誰かが自分を援けて呉れて、外的圧力を克服することが出来るならば安定感を維持出来るであろう。クラスで太郎の周囲の子供達が太郎をいじめたり、のけものにしたりするならば、太郎は敵対的な力にとり巻かれ安定感が脅かされることになる。周囲の子供達が太郎を援け、はげまして困難を克服させて呉れるならば太郎は不安にさらされなくて済

水原泰介

む。つまり、太郎の安定感とは周囲の子供達と太郎との対人関係の如何によって大きな影響を受けるのである。

安定感が脅かされている子供は他の子供への攻撃的行動が多くなったり、或は他の子供の中に入ることにしりこみして、ひとりぼっちになり勝ちである。また、落着きのない、いらいらした行動が多くなったり、ちょっとしたことでも怒ったり、泣いたりする。

また、他の子供達から自分が認められ、自分を必要とされる事が安定感を高め、生活に張合いを感じ、自信を強める。逆に、他人から認められず、必要とされないことが安定感を脅かす。自分が、グループから必要とされるようになるためには、グループが必要としている役割を果たさなければならぬ。電車ごっこをする時に、お客さんになった子供に対しては、グループは彼がお客さんの役割を演ずることを必要とし、それを期待している。このようなグループが必要としている役割をちゃんと果たす子供はグループに受入れられ、必要視されるであろう。このようなグループからの要請にこたえないような子供はのけものにされる。

このようなグループからの要請にこたえない子供の中には、(㊶) 知能、運動能力などが低い場合、(㊷) グループが必要としていることがどんなことであるかを理解出来ない場合、(㊸) 知

能、運動能力も十分であり、集団が要請しているものが何であるかの理解も出来るが、而かもその集団が必要としている役割を果たすことを怠る場合——などがある。子供を集団生活に適応させるためには、適切な指導によって、集団が必要としている役割に対して子供に眼を開かせ、積極的にそれにこたえる態度を養うことが望ましい。これが、協力することが出来るための基礎となるのである。能力が劣っているために集団が必要とする主要な役割を果たすことの出来ない子供には、その子供の能力にふさわしい役割（集団が必要としている役割でさえあれば主要な役割でなく副次的な役割であってもよい）を見つけて出してこれを与えようとよい。この役割を果たすことによって彼は集団から存在を認められ受け入れられる。このような経験を重ねているうちに彼は集団が必要としている役割を果たして集団から受け入れられることの「味」をおぼえる。そして集団が必要としている役割で自分の能力にふさわしいものを探してこれを果たすように努めるといふ態度が生ずるであろう。

グループは子供の態度や行動の方向づけを行う

クラス生活が続けられていると、子供達は相互に影響を及ぼし合い、クラスの中に態度や行動の一定の全体的傾向が作られる。例えば或るクラスでは、子供達の間にクラスの器具を大切に作る全体的傾向が作られた。このクラスでは皆がクラスの器

具を大切にする。このクラスでは誰にとってもそうするのが、あたりまえのことになるのである。グループにはこのように子供達全体の態度や行動を一定の型に方向づける作用がある。人はどのような行動をとるべきかの方向づけを必要とする。例えば新しく学校に入った当初にはどんな行動をとってよいのかはつきりしないことが多いために子供達は不安である。それが学校生活が続けられているうちに、色々と様子がわかり、このような場合にはこうすればよい、あのような時には、ああすればよいと云う風に行動の方向づけが明瞭になるにつれて安心して行動をすることが出来るようになる。我々が安んじてそれに従っていられるような行動の型というのは、我々の周囲の大多数の人々が同様にとっている行動の型である場合が多い。

つまり、周囲の大多数の人々と類似の行動をとっていれば安心なのである。そこで、クラス内に於てはお互に類似した行動をとることにになり、従って、全員の行動が類似したものになって来る。このようにしてクラス内に態度や行動の一般的傾向が生ずるということは、クラス内に、云はば、標準的な態度や行動が出来て来るということである。我々は集団の中ではその標準的な態度や行動をとっていれば安心していられるのである。従って子供達はこの標準的行動ののっとって行動する。このことは別の観点から見れば、子供達が皆で自分達の実践によって、その標準的行動を自発的に支持し、これの存続を固守している

ことになる。皆で力を協せてそれを守り続けるとも云えるのである。ひとたび標準的行動が出来上るとそれは永く存続する傾向がある。

子供達は標準的行動を自分達の実践によって自発的に支持し、守ってゆくのであるから教育上望ましい種類の態度や行動がクラスの標準的な態度や行動になるか或は望ましくない種類のものかクラスの標準になるかは、教育者にとって重大問題である。子供達はその行動の型を上から押しつけられたものとしてではなしに、自発的にとり入れ、守り続けるのである。従ってそれは最も身につき易いのである。そして子供達皆で一緒になって守り続けているのであるから、これを変えさせようとする外からの働きかけに対して強い抵抗力を持っている。

教育者は個々の子供の態度や行動の特殊性を理解しなければならぬと同時に、どのような態度や行動がそのクラスの標準的なものとなっているかに心を配り、望ましい態度や行動をクラスの標準にするように努めなければならぬ。一人々々の子供に働きかけ一人々々をよくしてゆく努力と共に、クラス全体に働きかけてクラスの全体的特徴、例えばクラスの標準的行動や雰囲気改善するための努力が必要である。

クラスの雰囲気と実験的発達

社会生活の技術、運動能力、知的作業の技術などを発達させ

るためには、何等の不安も感ずることなしに色々と試みてみる
ことが出来ることが望ましい。例えば、幼児が話し方をおぼえ
る場合には、色々と次から次へと試みてみる。大人からみると
間違いだらけの奇妙な「言葉」が続出する。併しこの種々様々
の試みが幼児の話し方を発達させるのである。若し誤った言葉
使いをしたらいちいち叱られるような家庭では話し方の発達が
かえって遅れる。正しい話し方を教えることは望ましいことと
ある。けれども、そのことが幼児の自由な試みを抑圧するよう
になる場合には逆効果が現れる。

幼児が他の人々と接触するようになると、いろんなことを試
みてみる。他の子供にいたづらしたり、攻撃したり、他の人の
ものをいじったり、或は自分のものを与えたりする。そしてこ
れらの仕方にも色々と変化を試みてみる。この場合にも、この
ような色々の試みが幼児の社会生活の技術の発達に非常に役立
っているのである。望ましくない試みはことごとく禁止され、
望ましい特定の振舞い方を強制される家庭の子供は社会性の発
達が遅れる傾向が見られる。民主的で寛容な雰囲気の家では
子供は不安なしに色々の行動を試みてみることが出来る。独裁
的で厳格な雰囲気の家では子供は不安なしに自由に色々の行
動を試みることが難かしい。我々が行った研究(註1)による
と民主的で寛容な雰囲気の家の子供(男子)は「親切」「大
人に依存しない」「他人と協力的」「礼儀正しい」などの点で

優れている者が多い。独裁的で厳格な雰囲気の家の子供(男
子)は「大人に依存する」「グループ遊びを好まない」「言葉
や動作がのろい」などの特徴が見られる者が多かった。

子供が色々な試みを行なってみるということは、云はば現実
の世界について実験を行ってみるようなものである。子供はこ
れによって現実の世界について数多くの体験を重ね、そこに働
いている「法則」を知るのである。どんな場合にどうすればど
うなるかを学びとるのである。自分で色々とやってみて学ぶ方
が、単に大人から教えられ指図されるのよりも、幅の広い、身
についたものが得られる。不安なしに色々と試みることが出来
る場合にはそれが積極性、自発性を高めることになり、また、
場面に応じて融通のきく適応の仕方をつけることが出来る。
このように不安なしに自由に色々の行動を試みてみることに
よる行動の発達を「実験的発達」と呼ぶ。実験的発達を助
成するためには、クラス内に何でも安心して試みてみることに
出来る雰囲気を作り出すことが必要である。クラスの雰囲気が
どんなものになるかは先生の態度や行動によって最も大きな影
響を受ける。先生が子供達の意思を十分に生かし伸ばしてやろ
うとしないで、先生の意図して通りに子供達を動かしてゆこ
うとするやり方の場合には、子供達が安心して自発的に試みる
ことが出来るような雰囲気は出来難い。あれは良い、これは悪
いと云う風に何でも直ぐに先生のもっている善悪の型にはめて

しまうという態度でなしに、子供が欲し、意図していることを生かすことの出来る道を開いてやり、或は子供が自発的に選択し決定するようにしむけてやり、その際に子供が自分で正しい道を選ぶようにヒントを与えてやるというやり方が望ましい。

悪い子供とか良い子供とか云わないで、そのまま子供を受けいれてやり、子供が望ましい行動をとるように場面をしつらえてやり、必要なヒントを与えてやって、子供が自分で選んで実行した自分の経験によって、良い行いをする事の「味」をおぼえさせるのである。このような先生の下では子供達は何等の不安なしに自分の欲することを試みてみる事が出来る。先生から「悪い子供だ」と思われたり、先生の愛情を失ったりするという心配なしに自由に振舞うことが出来るのである。私達の研究室で田中信子さん（現在は東洋英和女学院小学部在職）が行った研究（註2）によると、子供の自発的行動を促進し、子供の意志を出来るだけ生かしてやるというやり方の先生のクラスの子供達は、上から一方的に「教え導く」「指図する」というやり方の先生のクラスの子供達よりも著しく社会性が発達している。これは上に述べたような「実験的発達」によるものと考えられる。

子供が自由に振舞えるからといって、ここに述べたような先生の子供に対する扱い方を放任的なやり方と混同してはならない。放任されている子供は、自分が先生から受けいれられてい

るのかどうか不安だし、また自分のとる行動について適切なヒントが得られないので、その行動が障碍にぶつかったり、失敗したりすることが多く、欲求不満に陥り易い。

（註1）

水原泰介・井田薫子「家庭での育て方と幼児のパーソナリティ」児童心理と精神衛生

昭25、第3巻第5号二三—三六

（註2）

水原泰介「私は園児にどんな影響を与えているでしょう」幼児の教育

昭29、第53巻第11号二四—二六